

榎社

榎社は、菅原道真公（845-903）が最期の 2 年間に過ごした地にある。道真公は高名な詩人であると共に政治家でもあり、後に学問、文化、芸術の神である天神様として神格化された。道真公の墓所の上に造営された太宰府天満宮に、道真公は御祭神として祀られた。毎年、太宰府天満宮御本殿から榎木社まで天神様をお送りする大行列が開催される。神幸行事（神幸式）と呼ばれるこの 9 月下旬の祭礼は、太宰府天満宮の最も重要な年中行事である。天神様は豪華な神輿（みこし）の中に遷され、平安時代（794 年～12 世紀後半）の衣装をまとった数百人の参加者が、榎社まで約 3 時間の行列に供奉する。

道真公の時代、この地には南館という役人用の荒れ果てた邸宅があった。太宰府は貿易の中心地として比較的重要であったにもかかわらず、帝都からはとても遠く、かつて道真公が持っていたような政治的影響力を持つ地位もなかった。嫉妬深いライバル達のせいで天皇の寵愛を失った道真公は大宰府に左遷させられ、苦難の日々を送った。903 年に完成した歌集の中で、道真公は新たな生活の虚しさを詠っている。住居に閉じこもり、他の役所の屋根瓦以外には何も見えず、近くの寺の鐘の音以外には何も聞こえない、という。しかし、そんな惨めな生活の中、浄妙尼という年老いた女性が、梅の枝に餅を串刺しにして持ってきて慈しんでくれたという伝説がある。彼女の厚意のため、榎社本殿の裏手には、この浄妙尼を祀る小さな祠（ほこら）がある。天神様が彼女の霊を訪ね、感謝の気持ちを伝えることが、神幸行事の目的の一つとされている。

神幸行事の行列が榎社に到着すると、神社の氏子の人々は天神様の御神輿を担いで鳥居をくぐり、その先の石台に神輿を置く。祈りを捧げた後、神輿を担いで御本殿を廻り、浄妙尼の祠に向かう。天神様が浄妙尼にご挨拶を済ませると、担ぎ手は神輿を御本殿に戻し、その中に納める。南側の天拝山の山頂では、「迎え火」と呼ばれるかがり火が焚かれ、その明かりが神社から見える。榎社殿は天神様の一時的な在所となり、天神様は元の住まいで夜を明かす。翌日、太宰府天満宮に天神様をお連れする行列が戻ってくる前に、住民や参拝客も天神様に祈りを捧げにやってくる。

道真公が大宰府に左遷されたとき、道真公の幼い子供のうち同行できたのは、娘の紅姫と息子の熊麻呂の 2 人だけだった。浄妙尼を祀る祠の隣には、紅姫を祀る供養祠がある。熊麻呂の墓は少し歩いたところにある。